

お米とわたし

柏二中 二年一組 橋詰 穂乃実

「穂乃実」という名前は、母がつけてくれました。生まれたのは8月末なので、特にお米がおいしい時期ではありませんでした。が、「稲穂の様に、実り多い人生をおくってほしい」という願いを込めたそうです。

穂乃実という名前、そしてその由来を、私は気に入っていました。しかし、本物のお米だけは、どうしても好きになることができませんでした。

せんでした。

ある日、毎晩の様に自分のご飯を少なめに盛る私に、「お米はあなたの名前そのものなんだから、もう少し食べてほしい」と、哀しみを顔に浮かべた母がひかえめにつぶやきました。

私は、素敵な願いを込めて名前を考えてくれた母を、自分の好き嫌いというあまりに身勝手な理由で傷付けてしまった事を深く反省しました。そして、夏休み中に「お米を好き

になる」という目標を立てました。8月の頭のことでした。

その次の日から、私は早速計画を始めました。まず、お米について情報を集めました。

お米は主食として献立に取り入れられ、炭水化物を多く含み、一食の中の重要なエネルギー源として、私達の体を支えていることなどかわかりました。

しかし、どんなにお米が体に良いことかわからうと、おいしいと思えるご飯を食べてみ

ないことには、何も成果は得られないだろうと悩んでいた。その時でした。意外にも、チャースは私の足元に転がっていたのです。

八月の二週目。毎年恒例の会津旅行。母との祖父と祖母の家へ、車で五時間かけて向かいます。チャースというのはまさにこの事で、祖母は地元で採れた会津産コシヒカリを、お釜で炊いてくれるのです。お米好きの父と母は、毎年それを楽しみにしていました。

例年なら、両親がどんなに勧めてきても一

杯で箸を置いていた私ですが、今年は積極的に
におかわりをしようと心に決め、会津の地へ
足を踏み入れました。

そして初日の晩ご飯。机に並んだお米は、
いつも見ているそれとはまるで違うものの様
に思えました。「お米が立っている」という
言葉の意味を、目で理解したのです。

「ただきます」。

そう言いながらも、視線はお茶碗を捉えて
いました。箸を持ち、すぐに一口、お米を口

に入れました。

それは、一瞬で私のお米への苦手意識を崩
壊させました。程良いやめらかさと、一粒一
粒のやさしい甘みに、私は早くも、目標のゴ
ールテープを見据えていました。

その日から五日間、私は柏へ戻ってもお米
をおいしいと思える様になる為、たくさんた
くさんお米を食べ、少しでもお米を好きにな
れる様に努力しました。

朝と昼はなかなか食べる機会が少なく、夕

飯時にたくさん食べる様にしました。よりおいしく食べるために、昼間はしっかりと運動する習慣をつけました。

そして、とうとう柏へ戻る日。道が混んでいて、帰りはら時間もかかってしまったため、くたくたでした。

荷物を片付けていると、すぐに夕飯になりました。

食卓のいすに座ると、目の前に、いつも通り少なめに盛られたご飯が置かれました。

それを見て意を決した私は、お茶碗を持ち、炊飯器へ近寄りました。母の「もっと少なくするの？」という問いに、私は胸をはってこたえました。

「増やすの。もっと食べたいから。」
その言葉を聞いた時の、母の驚きと喜びが交じり合った様な顔を、私は今でも、鮮明に覚えています。